

て行くものは院展である。先に述べた通り、美術院派が最初からの理想を堅く持續し、其の中の新進氣鋭の畫家が揃つて眞面目に研鑽努力して居るから第一回即ち大正三年の院展に於て、院展の内容が文展の三分の一にも満たないのに、其質に於ては一步も文展に譲らなかつた。否寧ろ安田靫彦の御産の禱前田青邨の竹取の如きは、文展に於ては到底見る事の出来ない傑作であつたと云ふ世間一般の評である更に第二回の院展と全年の文展即ち第九回の文展とを比較すると、院展は更に其の畫が多趣にして活氣に満ち、内容の精整せる點に於て文展はたしかに院展に一籌を輸した様である。下村觀山の大作羽法師は其の蘊蓄を傾けて渾厚溫雅な趣を表し、技巧と内容との間に寸毫の隙もない傑作を出した。小林古徑は阿彌陀堂を描いて冥想的神秘の境を宗教的古建築に托して善く示した。院展はあくまで自由を標榜し拘束を無視して立たんとして居るので、文展と多少異つた方面に進んで行くが、兎も角この兩者は相對立して將來の日本の繪畫の新生面を開くべき重任を有して居る事は同一である。

以上は大體明治、大正の繪畫即ち最近の日本畫が如何なる道條を通つて進んで來たものであるかと云ふ事を文展院展を中心として述べたのであるが、要するに現今に於ては文展院展を通じて、寫實を根底とする繪畫が著しく優勢を示して來た。そして此等實景より得た所を繪畫化する爲に、或は倭畫に還へり佛畫に行き浮世繪に赴き文人畫に向ひ、或は裝飾畫に走り或は新描法に至らんとしてそれ〴〵苦心して居る。而して此等何れの方面をも着色して居るのは裝飾化の傾向である。即ちひきくるめて云へば寫實と裝飾とが現代日本畫の二大特徴であるらしい。

感想

書齋より

みち子

「人々との間に起る小さな衝突や氣まづさやで自分の心の静かさを破られ度くない」自分はいつもかう思つてゐる。けれど實行はできない。「あゝまだ自分はこんな所に低徊してゐたのかさ動搖しなから——又はしてかう思ふ。願くばその前にこの考が浮んで欲しい。其處に大きな矛盾があり悲劇がおこる。もはや自分はいゝ加減な口實のもとにこれを許しておく術を知らない。ほんま小さい石を投げ込まれてもぐらくさする人がある、なんさいふ小さい人間だらう私達はもつと強い筈だ大きい筈だ。清も濁も併せ呑むひろい心ですべてを受け入れ更に自分のものとするかしないかに就ては明らかなら理知の裁きに訴へなければならぬ。いつでもおろ〴〵し〴〵して統一も何もないうで英語の單語を引くやうなほつ〴〵の生活を醜しと思ひながらも私達のこの生活は何であらう。何處に統一がある。自分の眞の生活は何處にあるのか、私は長い間自分のほんまの生活を探して歩いた。しかし眞の生活は別の色をなす特別な形をして存在してゐるのではなかつた。私達の「ふだんの生活」それをおいて眞の生活はない。それに處する人によつて地を離れた浮いた生活さなり底の深い大地を踏みしめた生活さなる、雑巾がけな一生懸命するのも眞の生活である。何處までも眞面目に正直に考へた

生活をしなければならぬ。
愛は人の求むるところである。しかし一般的の愛ならばその價値も少いと思ふ。(勿論受ける人にまつて)眞の愛は幾分嫉妬を伴ひ獨占の傾がある。相手の全部を自分が所有し自分の全部を所有されても悔のない人——しかしそれはむづかしい事である。私はもはや安價な妥協の生活に堪えられなくなつた。それだといつて何うする事もできない。私は誰もいらぬ。誰にも求めない。一人で生きてゆかふ。生半可な理解と愛を得てそれに頼つて安心を得るやうな醜い事をよまう。そして泣きながら一人で自分の道を淋しく強く歩いてゆかふ、深山の間の湖のやうに靜かに、孤獨できれいに清んでゆき度いと思ふ。

何もしらない私は女の缺點のすべてを男にもつていつて男にはそんないやな事はない。女さいふものはいやなものださ密かに自分を咀つてゐた。しかしそれは狭く淺い私の想像に過ぎなかつたらしい。男も女も等しく神の造つた人間の半分である。私はかう疑ひかけた。

人間には眞から悪い人もない。全くの善人は勿論ない。人間は善人であり、悪人である。善人と思つてゐた人がふいさ悪人にかはることがある。善人さば悪の境遇におかれぬ幸福な人さいふ意味である。人間はすべて善人だと思つてゐた方が、多くの場合いゝ。しかし時には悪人さなるかもしれないさふ考をもつて、あまりゆるし過ぎないやうにした方がよくはないかと思つてゐる。

半間の窓を明け放つて、其處に擴がる紺碧の空を床の上でじつと見てゐるさ秋の光は、天地に遍滿してはてしなく深い。それを背

にしてあか／＼と染つた紅葉が、秋風の中に頻りに踊つてゐる。自然は何處までも清く美しい。私は美の極致愛の極致を見出す。日常は宗教等から遠く離れたやうにして生きてゐる。私もいひやうのない廣いふうはりさ、自分を包んでくれる大きな愛を感じずにはゐられなかつた。同時に小さい醜い人間を思ひ出さずにはゐられなかつた。夕の色は無限の空間から押し寄せてあらゆる物象は一つ色の中に消えて行つた。大きな寂寞が天地を支配した。しかし私の心は何さなく明るかつた。そして靜かに眼を閉ちて感覺外にさまよふていつた。

手紙

エツ子

私がnといふ人を知つてから丁度二年になる、nは牛込の西の方に住んで居るある學校の先生である、今迄にも随分色々な人に逢つたけれど、巧な言葉を実行で裏切つたり、實行を愚かしい言葉で打消してしまふ様な人達許りを見て来た眼にはnといふ人は少くとも異彩を放つて見えた、私はnを依頼した、(ある程度迄云ひたい、まだ本當に握手して居ない自分はnに全部をまかせてしまふ事はしなかつた、失望を恐れるさう臆病な態度ではなしに)兎に角nは私が今迄中で一番自分をより多く示し、より多く信頼した人であるそのnには去年の秋郷里に歸つた時手紙をかいて出した、随分主觀的な物であつた、自分の全部を表さなかつた彼女に對して可成りにこみ入つた事迄書いた、私は始に出さうか出さまいかと散々にためらつた、さう／＼ポストへ投げこんだ時、何だか義務をすまじたかのように感じた、二、三日経つて、私の心の一方が何だかそれは

大層いゝ先生だと思つてゐた。尋常二年から四年まで受持たれてその人格さ云ふやうなものには格別崇高だの優雅だの云ふ一つ一つの印象はないけれども、大して偉い人なつかしい先生だと思つてゐた。女學校に入つた時には先生は病氣で病院に居られたが試験の濟んだその足で花屋に行つてむら咲の櫻を買つて持つて行つた。今考へるそれは生花のお花であつたのであまり枝が大きくて殺風景なものであつたけれども私は一生懸命に活けた。小さい硝子瓶はそんなに苦心しても幾度も幾度も上が重いので覆へつて少し先生に恥じかつたが先生は大層喜ばれた。其頃の私は今もその通りであるが全く輕卒で出鱈目の事をする子供であつた。「落着かなくてはいけません。落付かなくてははいけません」といふも繰り返して仰つた。既分傲岸な子供であつたので仕舞には、あゝまた仰云ふ。よく解つてゐるのに。さいやだなと思ふ心持がする程であつたが、矢張り十年後の今日も未だこの悪い性質に苦しんでゐる。惜しい事にはこの先生は其時の病氣で亡くなられたが、莫然として好い先生偉い方さ云ふ觀念は今でも消えないでしみる、生きて居られたらと思つてゐる。この學校に入學試験を受ける時にも先生の名に禱り先生の寫眞を懐中して行くのを母は迷信の様だと思つたけれども、それ程強い純な力となり信仰となり先生の面影は私にある。もし現存して居られたならばそんな欠點を持つて居られたかも知れないと思ふ私の裡にある先生は非常に尊いものである。

今一人はこの寫眞を下さつた先生で女學校で二年程習つたのであるが又私の胸を一生離れない像である。私は殆ど年に數へる程しかお便りをしないけれども大きな私の安心の場所になつて居て、何か

はし出した。nは一体何ぞ思つてゐたらう、私はいくらnにも矢張り弱味は見せたくないのだのにと思ふと手の先迄が穩さを失つてしまつた、そして私の書簡丈が何かポストの中に残されて居る様な氣がして引つこ抜いて來様か位にも思つた、それで私はブル／＼とした手で草稿を出して讀んで見た、こんななら心配しなくても好い、思つて文庫の蓋をした、ハタリとしたその音が、何だかnの嘲笑を宿して居るかの様にも響く、私は矢張り落つた手を仕事に出す事が出来ないうで、又草稿を出して一二枚目につく様な字を拾つてよんで見た、次の日も亦文庫の蓋は何遍もそ／＼と取つたり閉ぢられたりした、草稿は、こは／＼になつて來た、それでもnからは未だ何さともよりがなかつた、せめてハガキ一枚でもよこして呉れたらさ、私は思つた、前日、バカらしいから止める、そして水曜日東京へ歸つた時逢ひさへしなれば好いちやないか、私の心が云つた、私は威張つて居様と思つた、けれ共矢張り本當は落着かなかつたし、nには逢ひたいのであつた。

出立の朝まで、こんな氣分が続いてnからは何の便も來なかつたnの重い封書を車の上で受取つた時、私は自分の乗つて居た車の底が落ちたんぢやないかしらんと思つた。

「断片より」

先生の像

うき代

近頃嬉しかつたことは青島に居られる舊師から寫眞を賜つたことであつた。

事があつてもそこへ行けば大丈夫の様な心持で居るけれども間違はないと思つてゐる。此の間、あの怖い不安と寂寞と憂愁とに責められた日の續いた末混亂から逃れる道も知らないごん底から堪らなく叫んだ一枚の葉書が先生の席に飛んだ直ぐ、それは久しい半年に近い御無沙汰の後であつたけれども折かへして數行の文句と御一族の寫眞が來て百万の援軍の様に私に慰めと喜びとを憑したのであつた。先生の手紙には別に何にも具體的のことはなくて、唯船が今出るからこれを送るのみであるけれども私はその中にそれだけの尊い情さ深い理と有難い諭しのあることを思つたであらう。これを持つて其の夜は絶つて久しかつた安らかな眠りに入ることが出来た。

私は此頃そう考へてゐる。眞にその人の肖像を尊く輝しく死ぬるまで胸に刻みつける、そこにある人は何さ云ふ尊いものであらうか。自分の胸に常に持つ先生の像は神の様に美はしく清く完全である。さうしても自分と同じ人であるとは思はれない。あゝ私はこんな尊い肖像を誰の胸にほりつける事が出来やう。まつたく先生は神の様に神聖である。この心の像に於て。

私は久しく疲れて居た。やつと今日雨が降つたせいも久し振りで嬉しい様なほ、笑みたい様な氣持になれた。淺い淺い極うはつらではあるけれども。

靜かな夕方だ。私は可愛らしい子供みた様な氣持で鐘がなつてゐるのを一心にきいてゐる。私のまわりにはすっかり何もかも捨てられてゐた。何さなくものに疲れ切つてすっかり馬鹿の様になつてゐる。青い青い空に視覚を奪はれたり、ものゝ音に氣をひかれたり官